第61回　ハネナガイナゴ

バッタの仲間のうち田んぼに棲んで稲を食べるものを「稲子」イナゴといいます。石川県ではコバネイナゴとハネナガイナゴの2種がいます。これらが本来の意味でのイナゴになりますが、実際にはイナゴと名前がついていながら、クズ群落などにみられるツチイナゴなど、稲をあまり食べない種もいます。

夏から秋にかけて、河北潟周辺の田んぼにはたくさんのイナゴが発生します。石川県では普通はコバネイナゴのみがみられますが、河北潟の周りには、なぜか他の地域にはほとんどみられないハネナガイナゴが多くみられます。

橋爪・弘中（2019）は、石川県中の水田87地点で捕獲したイナゴ類を調べたところ、ハネナガイナゴは河北潟周辺に集中してみられたことを報告しています。また、渡邊・八尾（2019）は、河北潟周辺でハネナガイナゴの発生が顕著な要因として、浸透性殺虫剤のフィプロニル剤が最近あまり使用されていないことが関係している可能性を指摘しています。

これらの研究は害虫防除の観点から行われたもので、ハネナガイナゴが農業害虫として個体数の増加に対して注意が必要であることを指摘しています。一方、石川県レッドデータブックでは2020年の改定にあたってハネナガイナゴを準絶滅危惧、すなわち種の存続への圧迫が強まっているものとして新たに選定しました。石川県内の過去の確認記録は少なく、2件の採集記録が記されている（石川県の昆虫、1998）他は、最近になって富沢（2013）及び高橋・川原（2014）により、いずれも2013年に河北潟の周辺や干拓地での採集記録が報告されているだけであり、記録が少ないことと分布が限定されることが選定の理由です。

こうした2つの相反する評価は、強い農薬使用により絶滅寸前にまで追いやられたハネナガイナゴがようやく個体数を復活しつつあるという現状を反映しています。もともと普通にいたものが農薬で減っていたのか、新たに侵入してきたいものかのどちらとみるかによっても評価が変わってくるでしょう。橋爪・弘中（2019）は、Ando･Yamashiro（1993）の情報を基に、ハネナガイナゴが2013年以前に石川県中部に侵入し最近増加したものと推測していますが、20世紀の確認記録があることから、石川県内でハネナガイナゴが絶滅せずに生き残っていた可能性も考えられます。

無農薬で田んぼをやっている実感としては、確かに最近イナゴが増えているように思いますが、今のところ被害が出る程ではないと感じています。複数の県で採用されている防除基準では、捕虫網を20回振り採集されたイナゴ類が100頭以下であれば防除の必要は無いというもので、概ね妥当な基準ではないかと思われます。予防的な農薬使用で天敵不在の生態系を作らない限り、年1回だけしか発生しないイナゴ類が爆発的に増えることは考えにくいと思います。（文　高橋 久）